



182号

2013/4/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



「ご飯の時間」 場 所：雲南省紅河ハニ族イ族自治州建水県岔科鎮白雲村 2007年1月

撮影者：楊添生(協会支援第11校「白雲小学校」児童)

「わんりい」182号の主な目次

北京雑感(73)季節の変化	2
私の調べた諺・慣用句(18)「真綿に針を包む」	3
媛媛讲故事(52)「花好き翁II」	4
【智子の雑記帳】91「震災から2年 あの日から…」	5
中国-城市めぐり(23)「紹興市」	6
中国の笑い話	9
日本探行記① 初体験・新発見	10
台湾登山ツアー体験① 出発	12
スリランカ・ケラニアだより②キリバットゴダ	15
スリランカ紹介(66)「路上で出会った動物たち」	17
モンゴル滞在日記VI	18
【活動報告】キルギス料理を作って食べよう会	20
「わんりい」掲示板	22

【写真説明】

日本雲南聯誼協会は雲南省山岳地域の少数民族を対象に、小学校建設を柱とした教育支援活動を行っています。2007年には支援小学校の子どもたちに使いきりカメラを渡し、「目に映るありのままの日常」を切り取ってもらおうという「小さなカメラマン」プロジェクトを立ち上げました。初めてカメラを持った少数民族の子どもたちが自由な感性で撮った、世界にふたつとない作品です。

昨年11月初旬、町田市池薬師公園・フォトサロンで展示した写真の中から3枚を選んで「わんりい」会報・新年号、3月号、4月号の表紙で紹介しています。

認定NPO 法人日本雲南聯誼協会

東京都新宿区市谷左内町21-13-1 階

☎03-5206-5260 FAX03-5206-5261

HP:<http://www.jyfa.org>

Facebook: <http://www.facebook.com/NPO.JYFA>

最近の日本の天気は、変化が激しいですね。3月としては「観測史上初」と言う夏日を記録したかと思うと、2月の寒さに戻ったり、関東以西では春うららの日差しのなか、北日本では猛吹雪で人的被害が続出したりと、驚くような気象関連のニュースが続きました。

昔から、春先は「三寒四温」とか言って、気温の変化がめまぐるしいのは経験済みですが、最近、冬の記録的豪雪や秋の超大型台風ばかりでなく、局地的な豪雨があたり、昔は余り聞かなかった竜巻が起こったりと、1年を通じて激しい気象災害に見舞われます。「穏やかな、四季の変化に富んだ日本」は何処へ行ってしまったのでしょうか。

その「穏やかな、四季の変化に富んだ日本」から、私が初めて長期滞在するため北京へ行ったのは2000年でした。丁度、4月上旬の清明節の頃で、日本では少し春めいて来ていましたが、北京はまだ寒いと言われて、厚手のジャケットを着込んで北京空港に降り立ちました。話に聞いたとおり、北京の気温は日本の2月末頃のように、着て行ったジャケットが大活躍しましたが、2週間ほど経った頃、朝から気持ちよく晴れ上がった日が来ると、気温がどんどん上がり、惰性で着て出た今までのジャケットは、脱いで手に持つのも暑苦しく感じるほどになりました。

たちまち強くなった日差しを遮って周りを見回すと、人々の服装は、昨日までとは打って変わった軽装で、中には袖なしのブラウスを着ている若い女性もいました。当時の北京の人々の服装は、今ほど華やかではありませんでしたが、それでも思い切り軽快な夏服です。昨日まではしっかりと冬の服装をしていたのに、どうして今日こんなに暑くなると分かるのか、本当に不思議でした。勿論、中には昨日のままの服装で、汗を拭きふきバスを待っている人もチラホラおりましたが、この人々はきっと、私と同様に北京の天気にな案内な他所からの訪問者なのでしょう。

それから後は、日増しに日差しが強くなって、4月中に既に日本の7月のような日が続くようになりました。つまり北京では春が無いのです。日本では、冬が終わると春になって、梅雨が来て、長い梅雨が明けてからやっと夏が来ますが、北京では、冬の後すぐに夏が押し寄せてきます。初めての年には、其の変化の激しさに、本当にビックリしました。

しかし、北京のお天気のビックリはこれで終わりま

せんでした。夏の暑さになりましたが、8月の猛暑とは違うので、楽しく出歩いていた5月のある日、午後2時ごろになって、雨がポツリと落ちて来て、たちまち文字通りバケツをひっくり返したような物凄い雨になりました。今までにこんな激しい雨に遭遇したことがあるだろうかと思うような雨でした。初めは雨の激しさに呆然としましたが、そのうちに、この雨の中、傘も無いのにどうやって家に帰ったら良いのかと考え始めた頃、雨は小降りになり、そのうちにぴたっと止んでしまいました。

その間、30分不足だったと思います。そして何事も無かったかのように、また太陽が出てきました。特に不思議なのは、雨上がりで太陽がしっかりと照っているのに、余り蒸し暑さを感じないことでした。日本では夕立の後に太陽が照ると、地面からの水分の蒸発で蒸し暑く感じますが、日本の夕立は7,8月、北京の今は5月ですから、やはり太陽のエネルギーが違うのでしょうか。

このような激しい雨が2週間近く毎日のように降り続いた後、今までにも増して強い日差しが一日中照りつけるようになりました。直射日光は強烈で暑いのですが、日陰に入るとスッと汗が引いて一息も二息もつけるのでした。そんな訳で、「北京の夏は暑いでしょう？」と聞かれると、私はいつも「暑いことは暑いけれど、湿度が低いので、日本の夏より快適です。」と答えていました。

ところが4、5年経つと、この午後の強い雨が少なくなったような気がし始めました。そしてある時、多分2005年か2006年頃だったと思いますが、朝起きて窓の外を見ると、雨が降っていました。春先に朝から雨など、初めてでしたが、そればかりでなく、其の降り方が北京らしくない、“シトシト”と形容したくなるようなもので、ちょっと日本を思い出して懐かしく感じたものでした。其の年はそんな雨が4,5回降りました。そして其の頃から、北京の夏の暑さに、湿気を感じるようになりました。日本の蒸し暑さと比べるとまだましですが、最近の北京の夏は、昔ほど爽やかではなくなりました。確かなデータがあるわけでは無いのですが、身体がそんな変化を感じています。

初めて北京で一年を過ごした時、北京の天気は過激だと感じましたが、最近、日本の気象の激しさは北京以上だ、と驚いています。

真綿に針を包む

私の調べた諺・慣用句 18

三澤 統

世間には実にいやな人間がいるもので、表面上はいかにもにこやかに接してきて腹の中ではどうやって相手を貶めてやろうかと考えているような人もいます。

こういう人間は、概ね上の者には散々お世辞やおべっかを使って、己の立身出世を図り、自分のライバルになりそうな人に対しては、口ではいろいろ旨いことを言っているが内心では事あるごとに相手を蹴落とそうと思案しています。

このようなやり方を評して“真綿に針を包む”といいますが、その典型的な人物が中国の故事に出きます。今回はその故事を調べてみました。

“真綿に針を包む”の意味は、辞書には次のように載っています。

▲小学館デジタル大辞典：

「真綿に針を包む うわべは優しいが、内心に悪意をもっていることのとえ」

▲小学館中日辞典：

“真綿で針を包む”と同様の意味を持つ中国の成語に“口蜜腹剣”があります。

「口蜜腹剣 kǒu mì fù jiàn 口先では甘いことを言い、腹の中では陰険なたくらみを抱く。真綿に針を包む。」



この成語の出自は〈資治通鑑^注〉・唐紀・玄宗天宝元年〉の「世謂李林甫“口有蜜，腹有劍”」（世にいう李林甫の「口に蜜を持ち、腹には剣を持っている」）の部分です。



李林甫は唐の玄宗の時代の軍部の長官兼中書令（官名）で、位は高く重い権限を有していました。

この人物は知識は深くて広く、書や画の才能も優れていましたが、性格が極めて悪かったのです。彼は自分より才能のある人、声望の高い人、権勢の盛んな人をことごとく妬み、いろいろと思案をめぐらして、手段を選ばず、排除しようとしてきました。

一方で、玄宗に対しては、こびへつらい、お世辞を

言い、胡麻をすっていました。その上、彼はあらゆる手段や方法を駆使して玄宗の寵愛する側室や腹心の宦官たちにおべっかを使い、歡心を買って、彼らの機嫌をとり支持を得ようとしてきました。そのようにして自分の地位の安泰を図ったのです。

李林甫は、人に接するときはずっと満面の笑みを浮かべ、穏やかで親しみ深い様子で、話し方も上手で聞くひとに感銘を与えました。しかし心の中では、どうやってこの人をやっつけてやろうかと思案していました。

有る時彼は、いかにも耳よりの情報を伝える素振りと同僚の李适に次のような話をしました。

「華山で大量の黄金が埋蔵されていると聞きました。もしそれを掘り出すことができれば国の財産を大いに増やすことができると思うのですが、皇帝はまだこの話をご存じないようですよ」

李适はこの話を真に受けて、大急ぎで玄宗のところへ行き、この話をして、早く掘り出すようにと建議しました。玄宗はこれを聞いて大変喜び、当時既に玄宗の側近に上り詰めていた李林甫を呼んでこの件について相談をしました。すると李林甫は

「私はどうにそのことを知っております。しかし華山は歴代の帝王が“風水宝地”（風水の良い大切な場所）としたところでありますから、勝手に掘り出すことは出来ません。誰かが陛下にその黄金を掘り出すように勧めているのだとしたら、恐らくその者が何か下心を持っているからだと思います」

と言いました。

玄宗は李林甫を忠臣だと思っていましたので、黄金の採掘を進言してきた李适の方を油断のならない相手だと思い、だんだん相手にしなくなりました。こうして李林甫は李适を玄宗から遠ざけることに成功したのです。

〈注記〉

資治通鑑：中国の歴史書。司馬光著。294巻。北宋の英宗の勅を受けて1065年編集に着手、19年をかけて84年に完成、神宗に献じた。歴代の事績を明らかにし、皇帝の政治の参考に供する意味で名づけられた。周の威烈王23年（前403）から五代後周末（959）まで1362年間の史実を編年体で記述し、政治、経済、軍事、地理、学術など広く各分野にわたっている。
(Yahoo! 百科事典 より)

さて、村の近くに賑やかな町がありました。町には、張という金持ちが居ました。この家には張委と呼ぶ息子がいます。張委は20才前後だというのに勉強もせず、仕事にも身が入らず、父親の勢力に頼って毎日、あちこちで道楽をしては、いざこざを引き起こしたり、不良少年たちとつるんで悪戯をしたりして、悪さの限りを尽くしていました。

そんな張委の仲間、町で遊び尽くして飽きてしまい、町の郊外の長楽村にやって来ました。長楽村のすぐ隣に張家の別荘があります。張委と仲間たちは気分転換のために別荘で暫く泊まろうと思いました。

ある日、張委一行は、お酒を飲んだ後、村中を見物しようと、別荘の下人に案内させて、あちこち歩き回りました。秋先(花好き翁の名前)の庭の前を通りかかった時、木の柵を通して、張委は庭のきれいな景色に見とれてしまいました。

「なんてきれいな庭だろう」

張委は感心して言いました。

「そうですね。これは秋先というおじいさんの有名な庭なんですよ」

下人が説明しますと、

「そうか。長楽村に花や、植物を大変上手に育てるおじいさんがいるって耳にしたことがあるが、まさかそのおじいさんの庭がここだとは思わなかった。じゃあ、中に入って見物させてもらうとするか」

張委は言いました。

「いや、この庭の主の秋先はとても植物を大切にしていますので、庭には滅多に人を入らせないですよ。だから誰でも柵越しで庭を覗き見るっきゃないんです」

下人が言いました。

「いや、他の人はだめかもしれないが、俺なら出来ないわけではないだろう？ 早く門を叩いて開けて貰ってくれ！」

と下人に命じました。

折しも庭は牡丹が満開でした。秋先は水やりを終

え、椅子に坐って、目を細めて牡丹を眺めながらお茶を飲んで一服しているところでした。と、その時、乱暴に門を叩く音が聞こえてきました。急いで門を開けてみますと、お酒の匂いを身体中からぶんぶんさせた若者がら、6人、門の前に立っています。

「皆さん、何かご用ですか？」

「早く入らせろ！花を見たいのだ」

「ごめんなさい。毎日花を見たいという方たちがとても多いのです。そんな皆さんを全部、庭に入れたら植物が耐えられません。そんな訳で皆さんには柵越しに見てもらっているんですよ」

秋先は丁寧に断りました。

「何を言っているんだ？俺が誰だか知らないのか？町でよく知られた張坊ちゃんのことを聞いたことがあるかい？それが俺だよ！」

張委は大きな声で怒鳴ると、秋先を横に押して無理矢理に仲間を連れて庭に入って行きました。秋先は仕方ありませんので、心配しながら其の後について行くしかありません。張委一行は庭をぶらぶらと歩きまわり、秋先が丹精して育てた色々な美しい植物がとても気に入りました。

暫く歩いて、牡丹の前に来ました。白、赤、ピンク、緑、黒までもあり、いろいろな品種の牡丹が満開で、その香りが馥郁と辺りに漂っています。

張委はその香りにうっとりとして、思わず手で牡丹を手前に引き寄せて、花に鼻を寄せました。

秋先は慌てて

「あら、いけません！手で花を引き寄せるのは止めて下さい！花から離れてご覧ください！お願いします」

と張委の袖を引きました。けれども、張委は「花もきれいだが、香りもいいんだ。花を近寄せて嗅がないと勿体ないだろう？ちょっと引き寄せて嗅いだからって花が駄目になるわけでもないし、なんでそんなに騒ぐんだ！」

大きな声で秋先に荒々しく言いました。

秋先は張委のような乱暴な人間に初めて出会っ

たので、どう対応すれば分らず言葉を失って、ただ体を震るわせていました。しかし、暫く我慢していれば間もなく立ち去るだろうと思いました。

しかし、張委は、牡丹の花を次へ次へと乱暴に手前へ引いたり、香りを嗅いだりして、帰えろうとする気配は全然ありません。その上秋先を吃驚仰天させる言葉を張委が言い出しました。

「そうだ。こんな美しい景色のところで花見をするには、酒がないと雰囲気合わないだろう？ おい、早く家に帰って、酒とつまみを持って来い！俺は酒を飲みながら花見したいのだ」

と下人に命令したのです。

秋先は吃驚しました。

「この庭はこんなに狭くて、お酒を飲むようなところじゃないです。花のご観賞が終了したら、もっ

と宴会に相応しいところでお酒は飲んで頂けないでしょうか？」

秋先は恭しく言いました。

「なにをいうんだ。今日、俺はこの庭がとても気に入ってここで宴会をしたいのだ。ここで宴席を張るのはお前さんが育てた花を評価してるってことが分からないのか」

張委はそう言うと、秋先の家を軒下に座り込んでしまいました。下人は張委の命令を聞くと宴会の支度をしに行きました。

暫くして下人が沢山の酒とつまみを持って来、張委とその仲間が地面にシートを敷いて輪を作って座り、笑ったりふざけたりして騒ぎ始めました。

秋先はそれを黙って見るだけで何も言えなず、何も出来ない状態でした。

(続く)

智子の雑記帳 91

震災から2年 あの日から変わったこと

先日の3月11日14時46分に黙祷をした。

NHKでは、「東日本大震災は風化していると思いますか？」というアンケート結果を放送していた。「風化している」と考えている人が多く、例えば、寄付金の額が減少していることなどが報じられていた。確かに、風化しているのかもしれない。けれど、あの日、東日本にいた人たちは、この日のことを、ずっと忘れないと思う。

私個人のことでは、震災前と後で、ちょっとした習慣が変わった。まず、帰宅難民を経験したことで、職場に運動靴で通うようになった。毎日通勤で使っていた革靴は、法事で1度履いた以外は、あれから一度も使っていない。お風呂の残り湯も以前はすぐに流していたが、今はぎりぎりまで残しておく。

千葉県に住んでいた知人は、震災後しばらく断水になり、トイレが流せなかったそうだ。お風呂の残り湯があれば、とりあえずトイレは流せるとい

う考えから、残り湯が捨てられない。雨の日などに、お風呂場に洗濯物を干したいときは、仕方なく残り湯を捨てるが、正直、ちょっと不安になる。翌日、お風呂を入れながら、何もなかったことにほっとする。

備蓄でいえば、水、お茶が店頭から消えた衝撃から、水と麦茶を定期購入するようになった。ダンボール箱単位で購入するが、残り少なくなると、これも不安になる。トイレトーパーも多めに購入するようになった。生理用品も、再利用できる布製のものを一定数購入した。震災時に避難所で、生理用品がすぐには届かなかったという声を聞いたからだ。

防災意識が高まった、といえは聞こえはいいが、何も気にしないで生活していた頃が懐かしい。私でさえ、こんなことを思ってしまうのだから、被災地の方々の不安やご苦労はいかばかりか。一日も早い復興を祈りたい。

(真中智子)

紹興市と言えば、紹興酒とこだまが返ってくるくらい有名な酒の産地である。

若いころは酒の苦手な私は、醸造酒と蒸留酒の区別もつかず、中国人でお酒の好きな人はみな紹興酒を飲んでいるくらいに思っていた。そして2007年に大連に赴任して白酒^{バイジュウ}という度数のとても強い酒を初めて見た。

辞書を引くと中国の醸造酒は“黄酒”と呼び、その代表格が紹興酒であることが書かれている。もう一つの対極にある酒が“白酒”と呼ばれる蒸留酒で、茅台酒や汾酒が有名と出ていた。大連勤務中は何かある毎に、白酒で乾杯、乾杯とやられたのには閉口したものだ。ここに挙げた三つのお酒は、中国八大名酒の一つだということも最近知った。

お酒の話はこのくらいにして、紹興市で書きたいのは人物である。この街は歴史上の人物を輩出している。また同市と深いつながりのある偉人も多い。なぜなのであろうか。前回の青島市では、康有為を青島とのゆかりのある人として描いたが、生まれやゆかりが青島市である歴史上の人物を私は殆ど知らない。私には紹興市が歴史的、地理的条件に恵まれたからだと思える。

紹興市の歴史は古く、紀元前490年頃街の体裁を整え、“越”の国の首都となった。春秋時代の呉の国との度重なる戦いは、「臥薪嘗胆^{がしんしょうたん}」の故事を生み出すほどで、歴史ファンにとっては興味ある時代である。また中国六大古都のひとつである杭州市とは指呼の距離である。これから書こうとする“南宋”の首都であった。

東にすこし行った所にある寧波^{ニンポー}は、古くから海外との経済・文化交流の窓口として重要な役割を果たした。遣隋使や遣唐使はこの港に着いたし、たとえば道元はこの港に上陸し、近くの名刹天童寺で修行し帰国してからは永平寺を建立した。従って両市の中間に位置する紹興市は、自ずから偉人を生み出す豊かな土壌を形成していったからではないかと推察する。

さて誰から書こうかと迷うほどであるが、私の好きな愛国の詩人“陸游”(1125年～1210年)について話を進めていきたい。

彼は12世紀初頭にこの街で生を受けた。当時の紹興市は南宋の時代(1127年～1279年)で、女真族の金の台頭により開封を首都としていた北宋(960年～1126年)から南に追いやられ弱体化していた。生来愛国的で抗戦思想の持ち主だった彼は、南宋政府の軟弱外交に異を唱え金に対し徹底抗戦し、奪われた領地を奪回すべきと主張し続けた。これがため役人となってもいつも中央から遠ざけられていた。

この軟弱外交の中心人物が“秦檜^{しんかい}”である。秦檜については、以前わんりい148号(2009年11月号)の「杭州見聞録」で書いた。かい摘んで説明すると、杭州市の西湖畔にある岳飛廟の境内に鉄製の像があり、観光客が蹴飛ばしたり、棒でたたいたりしていたその像の主が秦檜である。秦檜は、いまでいえば事なかれ主義の最たる男で、金に奪われた領地を奪回しようとした岳飛(1103年～1141年)を陰謀で捕えたうえ、毒殺した男なのだ。この男は陸游^{りくゆう}に対しても陰険であった。

陸游は幼少のころから文才を認められ、29歳の時科挙の進士の試験で首席となった。ところが時の権力者の秦檜の孫が次席であったため、恨みを買い及第できないという事態となったのである。

陸游は政治には激しい主張を貫いたが、私生活では清貧に甘んじ43歳の時に遺した「放翁家訓」(放翁は陸游の号)、で子孫に対し、欲望にとらわれず心の高潔を貫くよう「足るを知る」ことを強調し贅沢を戒めている。終生学問修養を積み重ね、一万首を超える詩を遺した南宋を代表する詩人である。ここで彼の人生のあるエピソードとそれに伴う詩を紹介したい。

——陸游が31歳の時である。前年(1154年)に礼部試験を受けたが、あの秦檜に落第とされ仕方なく故郷の紹興にもどり、うつうつとした日々を送っていた時のことである。

ある春の日潘園(潘氏の庭園)の桃の花はちょうど



陸游像

満開であった。彼は誘われるように庭園に入り池のほとりで佇んでいた。そのとき向こうから若い夫婦が供をつれて彼の方に歩いてきた。なんと女性とうえんは唐琬という彼の元の妻であったのだ。

11年ぶりに顔を合わせた二人は驚きのあ

まり声も出なかった。陸游は20歳の時に結婚したが、彼の母と、母の姪であった唐琬は折り合いが悪く、ほどなく離縁させられたのである。

二人は愛し合っていたが泣く泣く別れることになった。政治には厳しい主張をしても親には従わざるをえない時代であったのであろう。唐琬はすでに結婚し、その夫と連れ立って花見に来ていたのである。二人は言葉を交わすこともできずスレちがった。やがて彼女は夫にわけを話し供のものに酒と肴を持たせた。陸游はこの時の激情を詞に託し、庭園の壁に書き付けた。

詞の題は「釵頭鳳」(釵はかんざしの意) という。この題名は曲調の名で詞の内容とは関係はない。

(一)

紅酥手 黄滕酒
滿城春色 宮牆柳
東風惡 歡情薄
一懷愁緒 幾年離索
錯 錯 錯

つややかなその手からもたらされた黄滕の酒
春の景色は城内に満ち、土垣に柳がゆれる日
春の風はつらく、よろこびはあわい
胸に溢れる愁い、幾年あなたと別れていたのか
ああ過てり！ 過てり！ 過てり！

(二)

春如旧 人空瘦
淚痕紅 鮫綃透

桃 花 落 閑 池 閣

山盟雖在 錦書難託

莫 莫 莫

春は昔のままだが、あなたは愁いに瘦せていく
涙の痕は紅にそまり、薄衣をしみとおす
桃の花は散り行き、池の高殿はひっそりと
堅い誓は今も残れど、恋の便りを交すよしなし
ああ寂し！ 寂し！ 寂し！

この詞に対し、どのような形で後世に伝えられたのか分からないが、唐琬は自らも悲しみの歌を返している。片時の出会いの後、二人は二度とめぐり合うことがなかった。唐琬は失意の中でその後幾許もなくして没したという。薄幸の人であった。陸游の痛恨は生涯ぬぐい難く、たびたびこの地を訪れては追懐にふけている。瀋園には二人が交わした詞碑が建立されている。まだ見たことがないので次回紹興に行く時には是非見てみたい。

この宋词をもっと味わいたい人のため、若干説明したい。まず(一)の中の「東風惡」は、自分たちを離縁させた母のことを言っている。「幾年離策」は、何年も離れながら打開の方策を考える意である。一説によると離縁後しばらくは母に内緒で家を借り、時々逢瀬を重ねたがそれも母に見つかり逢うことも叶わなくなったという。「錯、錯、錯」は唐琬を守りきれなかった自分のふがいなさに、胸をかきむしられる思いであったのであろう。(二)の中では、まず「鮫」についてであるが中国ではサメの他に“ハンカチ”の意味があるそうだ。由来は南海の鮫人が織った絹のハンカチが出てくる物語が中国にはあり、転じてハンカチの意味にもなったそうだ。一度、何嬢嬢さんに教えていただきたい。「山盟」はことわざの「海誓山盟」のことで、海や山のように愛情が永遠に変わらないことをいう。

陸游について書けば紙幅がいくらあっても足りないので、次に“秋瑾”(1875年～1907年)を紹介したい。姓が秋チュウで、名が瑾ジンである。

秋瑾を知ったのは、2008年に杭州に旅した時である。岳飛廟からすこし行ったところに、剣を携えた等身大の真っ白な美しい像が立っていたのだ。友人

に聞いて“秋瑾”という女性を初めて知った。帰国して調べると、日本とも関係があった清朝末期の女性革命家ということが分かった。中国の女性解放運動の先駆者であり、ある本には「中国のジャンヌダルク」と紹介されている。この紙面で彼女の生涯を詳細に描くことはできないので、いくつかのエピソードを織り交ぜながら書き進めていきたい。

まず美しい玉を意味する“瑾”であるが、祖父がつけた名は“瑾”であった。瑾とは「むくげ」のことだが、生まれたとき庭には瑾の花が咲き乱れ、それにちなんでつけた名であった。彼女はこの花のように美しく成長していった。ところが世の中は親の期待したようにはいかぬもので、彼女は小さなころから男の子を集めては戦争ごっこをし、反骨精神は人一倍強く、成長してからは武術を習いたいと言い出した。

今、放映中のNHKの大河ドラマの新島八重を彷彿とさせる。頭脳も明晰で四書五経の暗記も兄弟姉妹のなかですば抜けて早かった。花嫁修業をさせたい親は、「この子が男であったなら状元となったであろうに」と嘆いたようだ。このような秋瑾なので“瑾”という字が好きになれず、親を説得し同じ発音の“瑾”に変えさせている。

さて彼女を理解するため当時の中国を取り巻く情勢を見てみよう。清朝末期は、中国は西洋列強に侵略され、さらに東方の小国であり、朝貢国と見下していた日本に日清戦争(1895年)で敗れた。祖国が滅亡の一途を辿っているのに清朝はなすすべもなく、自分たちの権利のことしか考えず反政府運動を弾圧するだけであった。周囲の男は強い者の顔色を伺うものばかりであった。一方で社会の風俗は「纏足」の奇習に縛られ、女性の人権は殆ど無視された。女性は正

規の教育は殆ど受けられず、結婚も親の決めた相手でなければためであり、妾になる女性も多かった。教育や結婚は日本も似たような状況であったが、閉塞感は比べるべくもなかった。

20歳の時、親の決めた意に添わぬ相手と結婚させられ二児をもうけた。夫は学問がきらいで目先の出世と遊びに明け暮れる毎日であった。何不自由のない生活であったが、国の前途を愁い、そして封建的な社会に我慢できなくなった彼女は夫に離縁を申し込む。それも許されなかった彼女は、日露戦争に突入したさなか幼子を残して、女子教育が進んでいるとされた日本に留学する道を選んだ。しかし、実情は中国と大差なく失望するが、日本は清朝打倒のための留学生を中心とした革命の拠点となっていたのである。ここで孫文や魯迅を知ることになり、水を得た魚のように革命のため身を投じていくのである。

ここでもう一つのエピソードを述べると

『秋瑾を乗せた船が神戸港に着岸したのは、1904年の6月末である。当初女性の地位のあまりの低さに反発して留学したが、留学生と接触する中でまず清朝を倒さねば何

も変わらないと思ひ至り、反政府運動の中心として活躍するようになった。そうこうするうちに中国同盟会の発足など革命準備が進捗するにつれ、清朝は日本政府に対し清国留学生の取り締まりを要請した。

日本政府は大陸進出の思惑もあり、1905年11月に「清国留学生取締規則」を公布したのである。これに多くの留学生は反発し、留学生会館で集会を開いた。演壇に立った秋瑾は、「諸君、ここに至っては全員帰国し清朝を倒そうではないか。この中には日本留学を出世の早道と心得え、学を修めようとする



杭州・西湖畔にある秋瑾像



日本留学中の秋瑾の写真

輩がいる。もし仲間を裏切り清朝政府にしっぽを振るような者がいれば私のこの短剣をくравせる」と、懐から愛用の短剣を取り出し演壇に突き刺した。その気迫に会場は一瞬飲み込まれたようになり、次の瞬間拍手が一斉に沸き起こった。

というのである。この激しさはいったいどこから来るものであろうか。紹興人気質の一面を表しているのであろうか。

帰国した彼女は故郷の紹興中心に革命運動に奔走した。同志が設立した学校で若者に軍事訓練も施した。しかし、この学校で武装蜂起を計画したが、この計画が洩れ遂に逮捕されてしまう。そして日を置かず1907年7月15日、公衆の面前で斬首された。32年の短い生涯であった。その処刑場は市の中心地にあり、その場所に「秋瑾烈士記念碑」が立っている。遺体は西湖の西冷橋のそばに葬られた。その後この

地にあった墓は移されて、その後に建てられたのが前述の剣を携えた白い立像で、「秋瑾嘯風」という本に出ていた。

裁判にもかけずに行われた秋瑾の処刑は、清当局が思いも及ばないほど中国全土に大きな反響を呼び、革命運動の精神的支柱となり、世の中を変えて行こうとする動きに激しさを加えて行ったようだ。彼女は「秋風秋雨、人を愁殺す」の有名な遺句を残したが、この句は多くの人に歌われたようだ。(武田泰淳は同名のタイトルの小説を書いている) なお密告した胡道南という男は同志に捕えられ惨殺された。孫文らによる辛亥革命が成就したのはその4年後であった。(続く)

※秋瑾の写真2枚は共に、ウィキペディア・フリー百科事典より転載しました。

中国の笑い話 VII (「365夜笑話」より)

第18話：どうやって起きるのか

小胖は寝坊助だ。母親は小さな目覚まし時計を買って来て、彼に言った。

「これから、毎朝、あなたはこの目覚まし鳴ったらすぐに起きなさい。私は毎日起こしに来ないわよ」

それから毎日、早朝6時半になると目覚まし鳴って、小胖はすぐに起きるようになった。ある日、母親が目覚ましをセットし忘れて、小胖は7時半まで起きなかった。

母親は彼を起こしに来て言った。

「小胖、起きなさい。もう遅いわよ！」

小胖は言った。「僕はとっくに目が覚めていたよ！」

母親は怒って、「目が覚めているのに、どうして起きてこなかったの？」と言うと、小胖は答えた。

「だって、お母さんは目覚まし鳴ったら起きなさいって言ったでしょう。目覚ましはずっと鳴らなかったのに、僕はどうやって起きればいいのか」

第19話：パパが僕にうつした

ある日、父親と息子は、二人とも寝坊をした。父親は会社を休むことにした。息子も学校を休むこと

に決めた。

父親は、息子に言った。

「私が出勤しなかったら、会社の同僚は、病気のせいで休んだんだと思うだろう。でも、お前はどうか？ 若し友達が、どうして休んだんだと聞いたら、お前は何と答えるんだね？」

息子は答えて言った。

「僕は、パパの病気がうつったので休んだ、と答えることにするよ」

第20話：どうして遅刻したか

遅刻した子供たちを並べて、先生が聞いた。

先生：「小明、君はどうして遅刻したんだね？」

小明：「お母さんが病気になって、病院へ薬を取りに行ったので遅刻しました」

先生：「小胖、君は？」

小胖：「家の時計が遅れていたの遅れました」

先生：「それで、小貝、君は？」

小貝：「朝、急に頭が痛くなって……」

先生：「あれ、小宝、どうして泣くんだね？」

小宝：「前の子達が理由を全部言ってしまったので、僕の理由が無くなってしまったんです」

(翻訳：有為楠君代)

日本語教材になった中国友人の日本体験記

岩田温子

3月のある日、中国の友人から「日本探検行」という一冊の本が送られてきました。表紙には著者名「鄧仁有」の他に翻訳者として本を送ってくれた友人の「李晴」という名前が書いてあります。表紙裏の作者紹介を見ると、なんと鄧さんは13年前の春節に山西省の北部を旅したときに旅行社からガイドとして就いてくれた人でした。

その旅は春節の風俗や剪紙といった民間芸術の名人を訪ねることが目的の旅で、もう一人北部出身の李晴女士が現地の事情に明るいということで旅に同行をしてくれたのでした。

その4年後、鄧さんは旅行社を退職し、青森県六戸町^注へ行き国際交流事業に携わることとなり、2年間を過ごしました。その間、様々な場所や機会に赴き中国の社会、文化などの紹介をしたり、中国語講座を開いたり、料理講習会を開いたりと忙しく過ごし、合間には現地の人々と温泉に入ったり、海釣りにいったり、お祭りに参加したりと中国に居ては知り得なかった日本の生活や日本人の姿に接する機会を得ました。この2年間に鄧さんが六戸で見たこと・感じたことなどを日本語で書き、六戸町の広報に毎月一回、「鄧さんがんばる」と題して掲載されました。

鄧さんは帰国後この23編にもなる体験記を本にまとめたいと考えました。そこで相談をしたのが当時日本語学校で教鞭をとる傍らエッセイを新聞などに投稿し、本を出版するなどの文筆活動をしていた李晴女士でした。李晴女士は鄧さんの体験記を一読するなり、彼女の教室の学生に読んで聞かせてやって欲しいと頼みました。彼女の学生は日本語能力試験の1・2級を目指すレベルで、鄧さんの簡潔な日本語の文章はヒヤリングの練習と中国語への翻訳練習にうってつけでした。また書かれている内容や単語もこれまでの教科書にはなかった新しいものです。

私のもとに送られてきた本は、鄧さんの発案で、日

本語で書かれた原文に出てくる漢字にはすべてにルビを振り、誰もが音読をしやすいように工夫し、わかりにくい字句には注釈をつけ、さらに李晴女士が原文に忠実に中国語訳をつけて翻訳の学習にも役立てるようにしました。「鄧さんがんばる」は素晴らしいユニークな日本語学習教材として誕生したのです。13年前の旅で出会ったお二人がその後は別な道を進みながらも日本語と係わり合いを持ち、再び一緒に仕事をし、素晴らしい結果を生み出したことは私の心にも何とも言えない温かみと喜びをもたらしてくれました。

【初体験・新発見】

鄧仁有

今年(2004年)4月9日に私は国際交流員として青森県六戸町に来てから、もう一ヶ月経ち、この間に、皆様のお陰でいろいろな体験をし、新しい発見ができました。

特に素晴らしかったのは花見です。今まで勤めていた山西省中国国際旅行社日本部の私の送別会の時に、同僚から弘前公園の花見を勧められました。

赴任して間もなくのことで、4月14日に青森市役所国際交流員のメアリーさんから、「新規国際交流員歓迎の花見会のお知らせ」とのFAXが届きました。それで社会教育課の上司と相談の上で

早速参加の返事をしました。

5月17日、早朝、担当の山内さんが、休日の朝寝坊を犠牲にしてわざわざ自家用車で三沢駅まで送ってくれました。7時23分発の直通電車に乗りました。日本での単身旅行はこれが初めてです。十数年、ガイドの仕事をしていましたがやはりいろいろ心配でした。

電車の中は乗客が少なく、一人で何席も使えるようで、しんとしていて疾走の音が聞こえるだけです。中国では稀に見る光景でした。どういう訳か、一部の乗客が、前向きに座席を回転しました。えー？ 席が回ります。これは私にとって一大発見



でした。

8時47分、また乗り心地の良いところで、終点の弘前に到着しました。駅を出た私は、お腹が空いていたので、駅前のマクドナルドに足を運びました。日本語が不十分な私は、注文の仕方もよく分からなく、高く飾ってある料理の写真を指差して「それを下さい」、「あれをください」と強調して言いました。食事中、周りのお客さんを見ていたら、皆食べ終わってから、自分で片づけて食器を返却します。これは私のもう一つの発見でした。後で分かったのは、日本ではセルフサービスが多いということ。中国のレストランは多くの女性スタッフがいて、セルフサービスはありません。

お腹がいっぱいになり、元気を出して歩きはじめました。20分ほど行くと、前方にピンク色の花が沢山咲いている木々が果てしなく一望できました。この中が弘前公園です。外側でもこんなに凄いのですから、中は言うまでもないでしょう。中に入ると大勢の観光客で賑わっていました。境内の本丸と言われる舞台のようなところで、大きな桜の木の下に、青森県の国際交流員らと一緒に、韓国人、アメリカ人、イギリス人、私たち中国人も座り込み初対面でも皆古い友達のように一緒に食べたり飲んだりして、結構盛り上がり冗談もよく言いました。その内に、髭がぼうぼう生えているイギリス人のマロンさんが中国で女性子供が遊ぶ「鍵子」(布袋に小石が入っている小さい球状のもの)まで持って来ていて、一緒に蹴ったりもしました。とても楽しかったです。

実際には、私は目の前の楼閣に興味を持っていました。それは天守閣と言われていました。以前に大阪城、名古屋城を見たことがありましたが、外見はすごく似ていて、日本独特の屋根作りで窓が小さく、電気コンセントのように見えます。後で、皆さんと一緒に登って中を見学しました。同じように中には貴重な藩政時代の史資料が数多く展示されています。今記憶している一つは、軸に草書で書いてある大きな二文字「ヶ月」でした。一体どなたが何のために書いたのかは、解説を見る余裕がなかったのですが書道として素晴らしいと感じました。もう一つは、拓本でした。これは墓の

石碑の拓本で、中国では「墓誌銘」といいます。これも具体的にはよく分かりませんでした。一見して漢の時代の「曹全碑」の字体とそっくりです。昔の中国の書道芸術は、確かに日本まで伝えられてきたのだと深く感じました。

名残を惜しんで、公園の出口で皆と別れる時、私の最後の挨拶で「この度は弘前花見、次は六戸の山桜。皆さん、如何でしょうか」というと皆が笑いました。初めての花見は順調且つ円満でした。

ところで、来月から私の中国語講座が始まることになりました。皆様のご参加を心からお待ちしております。それでは、皆様御機嫌よう。(2004.6)

註)六戸町：青森県上北郡東南部に位置した町

鄧さんが国際交流委員として派遣された土地は青森県の六戸町で、東京に住む私たちから見るとかなり地方の田舎町です。それでも、鄧さんが初めて日本に来て体験し感じたことを纏めた文章は、私たち日本人が読んでとても楽しいものです。日本の田舎町で、虚心坦懐に、日中友好事業活動を推進した一中国人の鄧さんの姿は、昨今の新聞などで報道される中国人のイメージを変える力があるのではないかと思います。

鄧さんの気持ちに‘わんりい’読者の皆さんの気持ちを寄り添わせて“鄧さんの日本での文化交流委員生活”を楽しんで頂ければと考え、岩田さんに鄧さんと李晴女士の了解を取って頂きました。毎号1篇か2篇ずつ‘わんりい’に掲載を予定しています。(田井)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

台湾登山ツアー体験① 出発

佐々木 健之

◆日本、台湾、中国、おさらい

ネットで台北発の登山ツアーを見つけ、興味を持った。3000m峰を2つ登る前夜発3泊4日のツアーである。記事によると、そのツアーは台湾最高峰玉山(3952m)や第2位高峰雪山(3886m)に登るより、困難度が高いらしい。私も高齢登山者なので、体力があるうちに難しい山から行こうと思った。ネットの文面は日本語表示だった。これを読んだ私は、軽率にも台湾で日本人向けに募集している日本人だけの登山ツアーと思ってしまった。けれども…。

台湾というと、中国の一部と思っている人は多い。私も以前は中国の一部と思っていた。しかし、少しずつそうでもないと思うようになった。私なりにおおざっぱにまとめると…。

以前の台湾政府、大陸出身の蒋介石(1887~1975)を首領とする国民党の主張はこんなふうである。

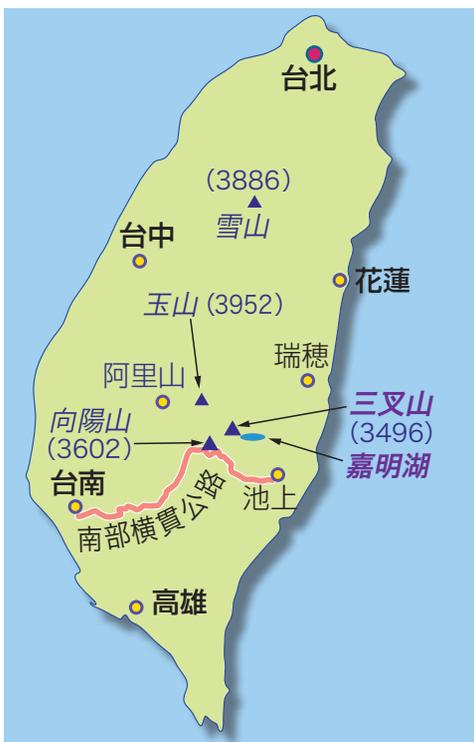
中国本土は国民党が看板を掲げる「中華民国」のもので、現在はやむなく台湾に避難しているが、中国本土の正しい政府はわが国民党政府で、当然台湾も中国の一部だ、と。しかし、実際の中国本土は蒋介石一派を駆逐した中国共産党の支配下にあり、現在に至っている。このことは年月が経つにつれ、世界の趨勢が認めることとなり、ついに1971年アメリカが台湾を捨て、中国と国交を結ぶ。冷戦中のことでもあり、旧ソ連を牽制する目的もあったのだろう。日本政府も後追いで1972年、台湾政府と縁を切り、大陸、すなわち中華人民共和国と国交を結ぶことになった。とって台湾を中国領土と認めているわけではなく、「中国の主張を尊重する」とした。中国共産党が台湾を支配していたことはない。

台湾の友人によると、国民党時代は、小学校での地理、歴史の授業は中国本土の地理歴史ばかりで、台湾

の地理歴史はほとんど習わなかったという。そして北京語が国語だ。国民党政府がそれほど、本土帰属にこだわっていたということか。

時代が変わり蒋介石が死去してしばらくすると、同じ国民党出身の李登輝(1923~)が指導者になった。彼は台湾出身つまり本省人^注。日本植民地時代の京都大学在籍中に、戦争激化で学徒出陣したという経歴をもつ。台湾総統となってからは台湾民主化に尽力した。後に国民党を離れ、台湾独立派の象徴的存在となっている。尖閣諸島は沖縄県に帰属すると発言したり、ヨーロッパ連合が優勢だった、台湾新幹線受注合戦を日本に逆転受注させた立役者ともいわれ、日本びいきである。

多くの台湾人にとっては、中国本土から来た国民党政府が、台湾は中国の一部だとの主張を押しつけられて迷惑している。強力な軍事政権の意向だったので、台湾の人も中国人ですよという、フリをしななければならなかった。しかしほとんどの人は、心情としては台湾は台湾で、中国とは別の国、別の社会組織と思っている。ただ、前述の台湾の友人によると、台湾の北と南では考え方が違い、いろいろな考えがある



台北駅の巨大な吹き抜け。去年のクリスマスツリー



下のホームが見渡せる捷運「古亭駅」。これで地下

ようだ。台湾人にとって台湾が独立するのが一番望ましいが、中国が許さない。国民党を支持する人は、台湾は中国の一部というが、中国共産党の支配下はいやだという。独立派も、台湾独立などと主張すると、中国を焚きつけて武力行使もありうる。従って一応の自治権がある現状をいつまでも維持するのが得策と考える。ただし、中国から多少の嫌がらせを受ける。たとえば、国際機関に加盟できない(中国が反対するので)など不都合なこともある。

中国人留学生や日本に住んでいる中国人から、台湾を開放しなければ…などということを知ったりする。ほとんどの中国人は台湾は中国の一部で、当たり前のことと思っているらしい。中国で教育を受けきたので、そう考えるのは当然だが少し残念でもある。

◆台北の地下鉄「捷運」

前置きが横道にそれた、登山道に戻らねば。

玉山や、雪山の紹介記事は探せばたくさんある。しかし、今回登る「天使の涙」高山隕石湖【嘉明湖】というのはまったく知らなかった。そして三叉山と向陽山という3000m峰にも登る。

行程表では台北を前夜発の専用バスで移動、1日目は途中の民宿。2目、3日目は中腹の山小屋に泊まり山頂往復、4日目下山となっている。中国語表現では三天三夜というらしい。

料金支払いはクレジットカード、アメリカドル決済で1人代金355ドル(約3万円)だった。これで3泊4日の交通費、宿泊費、食事代、ガイド料込みなら安いと思った。その時は公定レートが1ドル81円くらいで、さらなる割安感があつた。

九州より少し小さい台湾には3000m以上の高峰が200座以上もあって、日本以上の山国である。

3000m以上の山に入るには、当局へ入山申請をして、入山証を交付してもらう。これは通行手形の一環で厳密に入下山月日が決めている。人気の山は人数に制限があり、抽選となる。そして、有資格者と同行という制約もある。「有資格者」の定義はよく解らないが、ガイド育成や既成業者保護という一面もあるかもしれない。日本からこれらの入山手続きをするのは不可能ではないが、現実的ではない。そんなわけで、登山会社主催のツアーに申し込んだ。

2012年11月22日、私とツレアイは午前11時頃に台北松山空港に着いた。台湾には何度か来たことがあり、出入りはおおむね台北郊外の桃園飛行場だった。今回はごちゃごちゃした街中の松山飛行場だったので物珍しかった。松山飛行場は、日本の成田に対する羽田のようなもので、国内線中心、台北市街に近く地下鉄が乗り入れているので便利だ。

到着した松山飛行場はほどよい大きさと、延々と歩くこともなく、そして迷うこともなくタクシー乗り場へ着いた。タクシーを使う理由は雨ということもあるが、荷物を預けるためだ。運転手に「台北車站行李托運中心(台北駅荷物預かり所)」というメモを渡すと、分かったようですぐに走り出した。この荷物預かり所は、旅行社に事前に問い合わせさせて教えてもらった。荷物1つが1日17台湾元(約50円)と格安だ。台北駅そばのその場所は、倉庫の裏門という感じのたたずまいで、前もって知らなければ絶対分らないと思う。

荷物を預けることができ身軽になる。登山隊の集合は夕方18時地下鉄「古亭駅」なので、半日程の余裕があり、この間に昼食を食べたり、登山中の食料を仕入れる予定だった。便宜上「地下鉄」と表記したが一般には「台北捷運taibei jie yun(たいぺいしょううん)」、略して「捷運」、欧文略号でMRT(Mass Rapid Transit)と呼んでいる。レールを使わない路線や、地上高架部分もあるので以後「捷運」と表記する。

不慣れな土地でウロウロしていると、時間の経つのが早い。昼食を食べ、音楽DCを買ったり、1個10元のポンカン4個や、バナナを買うともう3時過ぎだ。

登山中の朝食・夕食は、登山会社側で作ってくれることになっている。だから、昼食2回分と嗜好品を用意すればよい。無人小屋利用のため、寝袋を使用するがこれも登山会社が山小屋にデポしてあり、持ち運ぶ必要がない。楽チンな山行であると案内を読んだときは思った。台北の「捷運」は慣れれば便利な乗り物



集合場所の台北捷運 (MRT) 新店線古亭駅2番出口

である。初乗り料金20元と安いのがよい。座席は硬いプラスチックで感触が悪いが、南国仕様なのでやむなしか。「捷運」はすべて地下を通るのかと思っていたが、モノレールのように道路上を高架で走っている路線もある。それが地下を走っている別路線の「捷運」と乗換駅と交叉するところでは、道路を切り開いたとても長いエスカレーターで連絡していた。

ちょっと路上観察。台北の道路は、東京と比べると広いと思う。その広さを利用して、道路の中央にバス停を作っているところがあった。昔の都電駅のような「安全地帯」だ。バスが停留所のある歩道側へ寄ろうと苦労したり、違法駐車が邪魔してバス停に停められないということもない。欠点は、横断歩道が青信号でないと、バスと競走して停留所に駆け込むことができないことだ。

まだ集合時刻には早かったが、台北ですることもなくなくなったので、「台北車站行李托運中心」戻って荷物してもらい受け、それを抱えて階段を下ったり上ったりして「捷運」に乗り、集合場所の「古亭駅」に向かった。

難なく、集合場所の「古亭駅」に着いてしまった。まだ16時過ぎで、集合時刻の18時までにはかなり間がある。ひとまず改札を出てトイレへ。

「捷運」各駅のトイレは気前よく広い。おまけに改札の外にあるので誰でも利用できる(構内に設置したトイレもあり、この場合は身分証を提示すれば乗客以外でも入れるという)。トイレに限らず駅の構造が日本の地下鉄と比べると大きめにできているように思う。設計施工にフランスが手を貸したせいかな？ プラットホームと上層の地下通路が吹き抜けになっているところもあり、地下という感じがしない。東京の地下鉄は、姑息な妥協を繰り返して増殖したため、通路は狭く、通路は不自然に曲がり、天井も低い。もともと低い天



広めの古亭駅男子トイレ。

井に冷房装置を組み込んだりして、いっそう閉塞感がある。

だが、台湾も地震国。地中にこんなに巨大な空洞を作って、耐震性は大丈夫なのかと心配してしまう。

トイレを済ませ、登りエスカレーターで外に出て街中を見渡せば、あまりぱっとしない無機質なビルが並び、用がなければ長居したくないところであった。

とりあえず、早めの夕食を手近な麺屋「阿妹麵店」で摂る。夕方早い時間だったので多くの飲食店はまだ開店前で、入ったのは旅行社から紹介された麺屋だった。豪華な夕食というわけではないが、一応、腹を満足させることはできた。欠点はビールが無かったことだ。

集合場所の「古亭駅」入り口に戻り、周りを覗いたが、リュックを背負った人影はなかった。

雨が本降りになり、夕闇があたりを包んで、集合時刻の18時近くなると、登山者の格好をした人達が雨具を付けて少しずつ集まった。

(続く)

注) 本省人、外省人

日本の統治が終わったのは第2次大戦後。本省人とは、それ以前から台湾に住む住民とその子孫のことで、福建系住民を中心に全体の約85%を占める。外省人は戦後、国民党政権とともに台湾に渡った人とその子孫で約13%。国民党政権では外省人が本省人を支配する形が続いた。本省人も、福建系住民と、主に中国南方出身の客家人に分かれ、双方の意識は異なっている。このほか、非漢民族でマレー・ポリネシア系の少数民族2%も住んでいる。

住民の社会意識の変化を調べている台湾・政治大学によると、1991年に「自分は中国人」と認識した人は26%あったが2001年には10%に減少。反対に「自分は台湾人」と思う人が20%から48%に増えている。

読売ニュースクリップより

私が住んでいる Kirbathgoda (キリバットゴダ) から大学まではバスで10分もかからない。ほぼ毎日バスで通っているが、最初はどのバスに乗ってよいかわからなかった。大学の先生方から138番のバスがよいと教えてもらったので、そのバスに乗って通っているが、これ以外にも利用できるバスは何種類もあるようだ。コロンボ行きのバスならばどれもよいようだが、どういう訳かいつも同じバスを使っている。同じバスなら安心ということもあり、また頻繁に出ているので、授業に遅れたりすることもない。

毎日乗っていて気がついたことがある。日本のSuicaのようなカードがあるわけではないので、毎回現金で払わなければならない。車内には運転手と車掌がいて、この車掌が料金を集めに来る。最初乗った時いくらなのか分からなかったので、尋ねたら10ルピーと言われたので、この金額で支払っていたが、ある時10ルピーを出したら1ルピーのお釣りをくれた。このようなことが何度かあった。「あれっ、本当は9ルピーなの(?!)」と思ったが、10ルピーなのか9ルピーなのかよくわからない。10ルピーは日本円で8円ほどなので、たいした額ではない。しかし、気持ちの上で本当はどっちなのかなあと思うことしきりである。

ある時細かいお金がなくて20ルピーを出したら、5ルピーしかお釣りをくれなかった。お釣りはと尋ねると、あわててもう5ルピーをよこしてきた。故意にこんなことをする乗務員もいるものだ。スリランカでは常にバスに乗る時は小銭の用意が必要である。こんなこともあった。バスではないが、スリーヴィラー(三輪タクシー)に乗り、降りる時お金を支払おうとしたら、乗るときに200ルピーと言われたので1000ルピーを出したが、運転手は「お釣りはないので、この次乗った時に支払ってくればよい」と言うではないか。この次って一体いつになるか分からないし、しかも再度めぐり合うことはないかもしれない。このような鷹揚なスリランカ人もいます(その後この運転手に会うことはなかった)。



街中を走る公共バス



バスの中。バスのフロントガラスの上にスリランカの神々が祀られている

一応バス停留場はある。都市部ならば、日本と同じように道路わきに表示板があり、ここがバスの乗り降りする場所だというのは分かる。しかし、日本のような行き先が表示されているわけでもなく時間も書かれているわけではない。

その上、頻りにやって来るバスには行き先はもちろん書かれているが、シンハラ語でしか書いてないバスがあり、こうなるとどこへ行くかは分からない。通常バスの前にはシンハラ語、英語、タミル語が書かれているので、英語を見て判断するが、スリランカのバスで便利なことが一つある。それはルート番号がバスに書かれていることで、ルート番号を見れば100%はどこ行きかが分かる。いつも138番のバスに乗ると前述したように、138番のバスに乗りさえすれば間違いなく大学前で停まるので、安心である。



スリーヴィラー (三輪タクシー)

もうひとつ気がついたことは、とにかくバスの運転手はスピードを出すことと運転が荒っぽいことである。乗った途端動き出し、危うく転びそうになったことが再三ある。降りる時も大変だ。普通後ろから乗り、前から降りるが、ゆっくり降りてなんかいられない。時折親切な乗務員がいて、乗る時や降りる時に手を貸してくれるので、安心して乗り降り出来ることもある。概して、乗務員は親切だ。外国人と分かると、降りる場所に近づいたあたりで、「もうすぐだ」とか「次だよ」等と教えてくれる。

乗務員の仕事ぶりはたいしたものである。バス停に止まると、絶えず「〇〇行き! 乗った! 乗った!」と大きな声で叫び、次から次へと客を呼び込んでいる。また、バスが止まっている間も客をバスに誘導し、自分はバスが動き出してから乗り込む。ドアは空いたままなので、乗務員が落ちやしないかどうかハラハラして見ている。しかし、慣れたもので、うまい具合に中に入り、中ではキップを切り、料金を徴収している。

バスの前と後ろのドアは常に開けばなしである。これもかなり危険だ。乗客はバス停以外のところから結構乗ったり、降りたりしている。私から見るとずいぶん危ないような気がするが、これはかなり多い。サリーを着た女性が乗り降りする時は、足元の裾がドアにからまったりすることがあり、注意が必要だ。

私はなるべく前の方に座ることにしているが、運転手のすぐ後ろの座席に座るときは注意が必要である。というのは、この席には“Reserved for Clergymen”と窓ガラスに掲示がある。つまり僧侶のための席である。空いてれば座る人は多いが、時折お

坊さんが乗ってくると座っている人は席を譲らなければならない。お坊さんはお金を払うのかどうか興味があり、しばしば観察している。お坊さんがお金を払おうとすると、車掌は要りませんと受け取らない場合ともう最初からでんで払わないお坊さんもいる。時には料金を受け取る車掌もいることはいる。

バスの話ばかりになってしまったが、最後にバスの中から街を見ていて気がつくことに物乞いの姿を見かけることである。頻繁には見かけないが、いつも通る道に毎日同じ物乞いがいて、目の見えない人や片足のない人が座っている。私はあげることはしないが、こちらの人はよく10ルピーとか20ルピーをあげていて、いやいやながらというよりは当然のこととしているようだ。宗教的な背景があるのかもしれない。かつて旅行したことのあるインドと比べると、物乞いの姿は非常に少ないし、その上纏わりつくようなしつこい態度をとることは全くない。スリランカの物乞いは大人しい。しかし、お金を恵んでもらったからといってお礼を述べることは一切ない。この点はインドの物乞いも同じだったような気がする。

(続く)

～スリランカに日本語教師として滞在中の為我井氏よりのお誘い～ **スリランカ旅行に参加しませんか**

‘わりい’の皆様、今年の夏はスリランカへいらしませんか。暑い時期に暑いところ行くのも面白いかと思えます。

時期としては、7月下旬から8月にかけての1週間ほどと考えていますが、ご要望があればもう少し長くすることも可能です。訪問地は、コロンボ、キャンディ、ポロンナルワ、アヌラダプーラ、ヌワラエリア、ゴール等の世界遺産地、そして可能ならばサファリツアーも加えたいと思います。

メインは、次のとおりです。

- コロンボからヌワラエリアまで列車の旅
- 紅茶園見学
- 4～5か所の世界遺産地を見学

費用は22万円程度を考えていますが、人数によっては多少の変動もありますので、ご承知おきください。ご希望があれば何でもお寄せください。

申し込み締め切りは5月初旬とします。

- ご要望とお問い合わせ：

為我井輝忠 tamegai1014@yahoo.co.jp

前回にも書いたように、仕事の都合で幹線道路から外れた田舎道を車で走る機会が多くありました。その度に色々な動物と出会います。ものの本によると、スリランカには 86 種類の哺乳動物、427 種類の鳥類、無数の爬虫類が住んでいるそうです。スリランカ固有種も多いようです。

路上では以前にも何度か紹介した野良牛や野良犬、野良猫には嫌と言うほど会えます。今回は違った哺乳動物を紹介しましょう。

スリランカの国旗は、赤地に黄色で短刀を持ったライオンが描かれています。有名なシーギリア遺跡に登る階段の入口にも巨大なライオン像が建てられていたと伝えられています。ところが実際にはスリランカにはライオンはいなかったそうです。伝説上の生き物だったのですね。そこで、スリランカの哺乳動物の代表と言えば象です。

今月、東京で開催された日本スリランカ国交樹立 60 周年の記念行事に出席するために来日された、マヒンダ・ラジャパグサ大統領がプレゼントとして持ってきたのも、2 匹のスリランカ象でした。12 日に多摩動物公園に寄贈するセレモニーがあったばかりです。

象はスリランカを代表する動物ですが、普段はジャングルの奥に居て、最近ではスリランカでも野生の象に道路で出会う事は少なくなりました。1970 年代から続いた LTTE (註) との内戦の主戦場がスリランカ北部地域だったために、北部に住んで居た農民が大量に南部に移住しジャングルを開拓したのも一因とされています。僕も赴任期間の 2 年間でたったの一度しか出会う機会はありませんでした。

いつもの様にウダヤ君と一緒に田舎道を走っていると、突然ウダヤ君がかなり離れたジャングルの方向を指さして「ワイルド・エレファント」と叫びました。ジャングルの少し手前の道路の脇で子連れの象が何か食べています。飼育されている象は多くいますが、前述のように野生の象は減って来ています。スリランカ人のウダヤ君にしても久し振りに出会ったそうです。スリランカ人の間では、野生の象に会うと運勢が上向きになると言われていて、非常にラッキーな事

だそうです。

車を停めて象の動きを観察していると、次々に走ってきた車も停まって同じように観察を始めました。大きな音を立てて、象達が驚いてジャングルに戻らない様に、少しでも長い時間象を見ていられる様にと、皆申し合わせた様に静かに見守っています。10 分ぐらいいは見ていられたでしょうか。残念ながら反対方向からカーブを曲がりながら、オンボロバスが大きなエンジン音を響かせて登場すると、象達は急いでジャングルに駆け込んでいきました。皆がバスの運転手に文句を言うと、ちょうどカーブを曲がっていたので運転手は象に気づいていなかったのでしょうか。何で文句を言われているのか判らない様子です。理由が判ると、運転手だけでなく乗客たちもひどく落胆した様子です。

自分達も野生の象を見たかったのでしょうか。このようにスリランカの人達は野生の象をととても大事にしています。何らかの理由で親象から離れてしまった子象を保護するために、キャンディの西約 30 Km のキヤーガッラの町に「象の孤児園」が設けられています。此处で一日に 2 度づつ行われる、大きな哺乳瓶でミルクを与える食事時間と、近くの川まで集団で行進をして水浴びに出掛ける時間が名物になっていて、多くの観光客を集めています。子象は成長すると各地のお寺等に引き取られていきます。

今度は田舎道で数多く出会う鳥の話をしてしまおう。カラスを除いて孔雀が最も多く出会う鳥です。羽を広げていない時には目立たないのですが、車の前方で突然羽を広げると、その青藍色の羽の見事さに見とれてしまいます。雄が羽を広げるのは雌に対する求愛行動だと習ったのですが、スリランカの孔雀は雌がいなくても羽を広げてくれます。サービス精神が旺盛なんではないかな。孔雀は路上だけでなく、スリランカの

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを 1cm ほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

いたる所で見られる鳥で、仏教の信仰の対象とされているために、各地のお寺で大切に保護されています。また、一度などはコロポ市内にあるデヒワラ動物園の園内でも野生の孔雀が羽を広げている姿を見かけました。園内には籠の中で飼育されている孔雀もいるというのに、可笑しい話です。

路上で見かける爬虫類というと、代表はリクオオトカゲです。1メートルを超える巨体が突然、目の前を

のっしのっしと横切ったりするので驚きます。水の少ない場所を好んで棲んで居るそうで、道路脇の空の側溝が大好きな場所だそうです。リクオオトカゲにはさすがに毎回は会えませんが、たまにみると恐竜の末裔かと思われるような容姿に見入ってしまいます。

その他には野生ではありませんが、大道芸人が連れ歩いているヤマアラシやコブラ、猿などは路上で頻繁に会う動物です。



モンゴル滞在日記 VI

木之内せつ子

7月27日(金)

夕方、ファッションショーというのを見に出かけた。映像では見たことがあっても、生でみるのは初めてだ。ダミヤザヤの姉が、以前モデルをしていたとかで、伝があって今回見に行くことになった。その会場は、座席が150くらいあり、モデルたちが歩いてくるキャットウォークと、観客席との間が狭いので、間近で見られる。モンゴルの伝統的な民族衣装を、現代的にアレンジした衣装で、美男美女が次々と登場する。その合間に、馬頭琴、歌、アクトバット、仮面舞踏等、盛りだくさんで、観客を飽きさせない。ツアーコースに入っているのか日本人団体客もいた。

7月28日(土)

ツォゴウヤデルメヤトガは、東京や千葉の大学の留学生だが、ヘルレンは大阪の大学の留学生だ。関西の大学の留学生から、“大阪のお父さん”と呼ばれている酒瀬川実氏は、UB郊外にサマーハウスを持っている。ヘルレンから、一緒に彼のところに行かないかと誘われた。酒瀬川夫妻は、夏の間だけの2・3ヶ月をそこで生活しているが、それ以外は関西で暮らす。彼らが日本に返っている間は、関西で世話になった留学生たちがサマーハウスをまもる。

昼ごろ何うと言ってあったが、結局出かけるのが昼過ぎになってしまった。大人はヘルレン、デルメ、M、私の4人、子どもはデルメの甥のバイヤルカ(3歳)とサイハナの娘のサラング(5歳)のふたり、全部で6人だ。6人でも全員が集まるとなると、予定通りにはならないのがモンゴルだ。

ヘルレンの車で2時過ぎにサマーハウスに到着。す

で何人かの若者(全員関西の大学へ留学していたときに、“大阪のお父さん”に世話になった)が来ていて準備をしていた。

男性は庭で火おこしやテーブル・椅子のセッティング、女性は家の中で酒瀬川夫人を手伝って料理。日本から持ってきたコシヒカリを炊いて、手巻き寿司。Mは台所の手伝いに入ったが、デルメと私は、外でホルホグ(行宮焼)の野菜切りを手伝った。バイヤルカとサラングは、先に来ていた子どもたち3・4人の中に入って遊び始めた。

酒瀬川氏は、グラス片手に外の椅子にゆったりと座り、動きまわっている若者に時々声をかける。彼はもうかなり飲んでいる。私たちもビールを飲みながらジャガイモの皮を剥く。ホルホグは、ホブドの河原で“親の会”の人たちが作っているのを見ていたので、だいたいの作り方はわかる。密閉鍋に肉、野菜、焼けた石と、次々入れていくのだが、酒瀬川氏はその途中で、ビールやアルヒ(!?)も入れる。1時間ほどでホルホグは出来上がった。台所からも料理が運ばれ宴会が始まった。歓談はもちろん日本語だ。子どもたちだけは、モンゴル語だが、彼らは初めて会ったのに、すぐに友だちになり、水遊びやボール遊びに興じている。

この家にはかき氷器までそろっていて、子どもも大人も喜んで食べた。ツァツァラガンジュースをかけると美味だ。ツァツァラガン(日本語では何というかわからない)という植物があるようで、そのジュースは赤くて甘酸っぱい。モンゴルのスーパーでは瓶詰で売っている。

突然大粒の雨が降りだした。その頃には料理もあらかた食べ終わっていたので、私たちは急いで飲み物だけを

持って、屋内の屋根裏部屋に引き上げた。ここもかなり広くて20人くらいは余裕で入る。Mや私のグラスの中身は、すでにウーロン茶や麦茶になっているが、酒瀬川氏と若者たちは、まだビールや焼酎やアルヒを飲んでいる。車で来ている人もいるだろうに、大丈夫なのか…。3・4台停まっていたはずだ。私は、運転手のヘルレンのグラスの中身が気になった。デルメは飲酒運転で捕まって、免停になったことがあるというから、モンゴルだって取締りはあるだろう。

7時を過ぎるころから、子連れはそろそろ帰り始めた。雨は止んでいた。私たちも7時半過ぎにお暇した。運転手のヘルレンは飲んではいるが外見は素面。検問に遇わないことを願う。途中で寝てしまったバイヤルカをデルメの姉の家に送り、検問にも遭わず無事帰宅。サラングの母親のサイハナは、土曜日なのにまだ仕事なのか連絡がとれない。11時過ぎてやっと彼女が娘を迎えに来た。やれやれである。



7月30日(月)

午後になって、航空券を頼んであったダミから、明日の朝の便のチケットを予約したから、と連絡があった。予定では明後日のはずだったのだが…。仕方がない。航空券の手配を自分でしないで、人任せにするとこんなこともあるのだろう。帰国準備開始。Mは延長ビザを取って、8月末まで滞在することになっている。

あわただしく荷物をまとめる。暗くならないうちに近くのスーパーに行った。モンゴル滞在中ずっと飲んでいたらスーティーツァイ(塩ミルクティー)のティーバッグとアルヒを1本買ってきてトランクに詰めた。



7月31日(火)

チンギスハン空港までヘルレンとMが送ってくれた。早朝なので車も疎らだ。スフバートル広場付近以外は、ほとんどノンストップ、つまり信号無視で30分足らずで空港到着。Eチケットもなかったが、パスポートのみでチェックインOK。定刻離陸。

ウランバートルから成田までの機内で、今回の4週間の旅を振り返る。

日本に何年か留学して帰国した若者たちと一緒に4週間過ごしてみて、それぞれみんな活躍しているのがよく分かった。でも私生活面での若者は、古い人間の私にはよく理解できないこともある。Mが言うには、デルメのガールフレンドは、毎夏モンゴルに行くたびに替わっ

ている。デルメに直接訊いてみた。彼曰く、“彼女と付き合う際、相手の考え方や自分への思いは、からだの関係ができて初めてわかるものでしょう。”“あらあ〜!そうかしらあ〜!?”と私。

モンゴルの男女交際はおおらかでオープンだ。未婚のまま出産する例も少なくないそうだ。デルメの姉は未婚の母だし、留学生の中にはシングルマザーもいる。一昨日酒瀬川宅と一緒にいったサラングの母、サイハナもシングルマザーだ。こうした家族をみんなで支えあう雰囲気はいいなと思うのだが…。現にデルメは甥のバイヤルカを可愛がり、姉にも経済的援助をしている。

ホブドでのボランティア1日目の1番にとび込んできた、“粽巻き”(ぐるぐる巻き)の赤ちゃんにはビックリした。あの状態で1年間くらい育てるそうだ。ぐるぐる巻きは、寒さの厳しいモンゴルでは手足を出さない工夫であり、赤ちゃんの精神を安定させると言う専門家もいるとか…。モンゴルだけでなく南米でもそうするらしい。

1歳を過ぎてぐるぐる巻きをとってあげると、ハイハイやヨチヨチ歩きなしですぐに立って歩きだすとのことだが、本当だろうか。信じられない。5日間のボランティアで会った20数名のうち、上肢と下肢に問題がある子が何人かいた。私は専門家でないから、これはあくまでも推測にすぎないが、生後1年間ぐるぐる巻き状態で、手足を動かさないことと関係ないだろうか。

ホブドでのボランティアについては、思い残すことが多々ある。私たちはホブド県知事の紹介ということで、特別待遇を受けたが、はたしてそれに見合った“仕事”ができたのだろうか…? モンゴルの教育事情(特にハンディキャップのある子どもたちの)を事前にもっと調べておくべきだった。予備知識を全くもたずにホイホイ付いてしまったのだから、納得できるボランティアができなかったのも当然のことだ。

今回は体力を使うよりも、相談やアドバイスということで、ことばでのコミュニケーションがほとんどだから、通訳者が必要不可欠だ。私たちはツォゴウだけが頼りだった。彼女がいなければ何もできなかった。ホブド大学には日本語学科があるという。夏休み中だから無理かもしれないが、そのの学生が少しでも力をかしてくれたら、ツォゴウの負担が多少は軽減され、私たちの“仕事”もより効率よくスムーズに進み、学生にとっても日本語実習ができる。これぞ一石三鳥というのは安易すぎるか…?

Mは、特定非営利活動法人“ニンジン”のメンバーだ。ニンジンとはモンゴル語で“人道的な”という意味。“モンゴルの障がい者との交流・支援の輪から広がった人間的な社会をめざす市民団体”とある。Mがこの10年ほど毎夏モンゴルに行くのは日本の酷暑から逃れるためだと思っていたが、ニンジンの活動で、車椅子や下肢装具をモンゴルに届けたり、現地の療育センターで交流したりもしていたのだ。だったらもっと情報をこちらにも流してくれればよかったのに…。あとの祭りか…。

午後2時、成田空港着。

(おわり)



【追記】

2月中旬、デルメとトガが来日した。モンゴル政府関係と日本の国交省の会議の通訳が主な仕事で、1週間ホテルに缶詰だったという。

先日、半年ぶりに新宿でふたりと再会した。彼らは3月上旬まで滞在していたが、Mのところにはほとんど泊まらず、日本国内を忙しくとびまわっていたようだし、彼らには1度だけしか会えなかった。私の昨年の旅が、不完全燃焼だったのなら、今年またモンゴルに来れば良いと、彼らは誘ってくれたが、おそらくもう無理だろう。

◆ ‘わりい’ 活動報告

キルギス料理を作って食べよう会 (参加者：17名、うち留学生：4名)

2013年3月21日(木) 場所：まちだ中央公民館・調理室

昨年12月に、町田市の地域支援事業の助成により開催の「つながろうひろがろう…」(12月2日開催)事業でスピーチされた、国土舘大学21世紀アジア学部留学中のキルギス人留学生・ケレザさんを迎えて、キルギスで日常的に良く作るという、手延ばしの麺「ラグ麺」作りを体験しました。



キルギス料理の説明をするケレザさん

どのあたりに位置するのも知らなかったのです。地図で調べてやっと中国、カザフスタン、ウズベキスタンに挟まれた緑豊かな可愛らしい遊牧国家で、シルクロードで知られた天山山脈のすぐ下にある国と知りました。

しかも、今年になってキルギスを紹介する

ケレザさんは「つながろうひろがろう…」事業で、堂々とした日本語によるスピーチに加えて、事業の幕間にはキルギスの民族楽器・コムズを演奏下さったり、「つながろうひろがろう…」事業の一環として開催の「留学生たちと料理で交流しよう!」では、キルギス料理も披露くださるという多彩な才能の持ち主です。

実は、私はケレザさんや他の、キルギス人留学生と知り合うまでは、キルギス共和国が中央アジアの

NHKのテレビ番組が有ったり、2月末から3月初めには、キルギス共和国大統領が来日し、両国の首脳や両国の外務大臣が会談し、共同声明「日本国とキルギス共和国との友好、パートナーシップ及び協力の更なる深化に関する共同声明」を発表するなど、日本と意外と近い国だったのでね。

では、早速手延ばし麺の講習風景を写真で披露しましょう。



強力粉を渾身の力で捏ねる



捏ねた種を30分ほど寝かして短冊状に伸ばす



縦に5等分する



棒状に丸めて油をたっぷり塗り大皿に渦巻き状に並べる



渦巻き状に置いた麺生地を中心部から順次引き抜いて、指先でねじりながら繰り返し伸ばしてゆく



或程度に伸ばしたところで両親指にあやとりをするようにひっかけて台に打ちつけながら延ばす



4～5人ずつグループになり、見よう見まねの手つきで、協力しながら麺を打つ参加者達



出来上がったラグ麺。腰が強くてかみごたえがある感動的な美味しい麺だ



中国人留学生の皆さんも一緒にラグ麺作りを楽しんだ



ラグ麺を楽しむ参加者達(手前左がケレザさん)



キルギスの民族楽器・コムズを聴く



◀ クルミとレーズンに蜂蜜という上質な材料をぎっしり詰めたパイ風のお菓子「トモモ」。キルギス北方のお正月には欠かせないお菓子だそう。甘みはレーズンと蜂蜜だけの素朴な味わいが美味しい。



当日のメニューは、ラグ麺の他、講習日が丁度キルギスのお正月に当たるとのことで、キルギスの北方地方のお正月用パイ風のお菓子「トモモ」、キルギス風にヨーグルトで和えたサラダ、ミルクティで、食事後、ケレザさんがコムズという三弦の珍しい楽器の演奏してくださり、会場にキルギスの雰囲気盛り上がった。(報告者：田井)

◆わんりいの催し

パンとお菓子作りのプロに教わる

《失敗しないシュークリームやパウンドケーキの作り方》

長年パン作りに携わって来、中国のホテルなどでもパン作りを指導されている杉野一氏による特別講座

- ▲会場：まちだ中央公民館・調理室
小田急線南口・横浜線ルミネ口徒歩5分 町田市原町田6丁目
8-1 町田センタービル109、6F
- ▲2013年4月19日(金) 13:30～
- ▲参加会費：1500円(講師謝礼・会場費・材料費)
- ▲持ち物：エプロン・筆記用具



＊留学生の皆さんはご招待です。

中国で子供たちにパン作りを指導する杉野氏

●今回の講座では、手づくりの健康的で美味しいカスタードクリームを詰めたシュークリームの他、誰でも作れているように応用できるパウンドケーキとクッキーなどの作り方のコツをご指導いただきます。お土産付きですのでご期待下さい。

■ 問合せ&申込み：☎040-734-5100(わんりい)

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！
正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景
や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！

- ▲場所：まちだ中央公民館・学習室
- ▲月日：4月の講座、年4月28日(日)
5月の講座、年5月19日(日)
- ▲時間：10:00～11:30
- ▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)



＊録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!

ボイストレーニングをして、日本人が長い間、親しんだ
童謡や抒情歌などの愛唱歌を気持ちよく歌いましょう。

- ◆動きやすい服装でご参加ください
- ▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室
- ▲月日：4月16日(火)・5月21日(火)
- ▲時間：10:00～11:30(時間変更します)
- ▲4月の練習歌「茶摘み」、「早春譜」
5月の練習歌「浜辺の歌」
- ▲講師：Emme(歌手)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：15名(原則として)



●申込み：わんりい ☎042-734-5100
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

日本雲南聯誼協会主催・全国巡回活動写真展

「笑顔を君に」in 日野

<http://jiitp.co.jp/jyfa/0307hino.pdf>



過酷な環境の中国雲南省山岳地帯、そこで出会った子供達の
かけがえのない笑顔を皆さんにお届けします

- ▲会場：ひの社会教育センター 1階ロビー
東京都日野市多摩平4-3
- ▲会期：4月10日(水)午後～4月17日(水)午前
- ▲入場無料、お申込の必要はありません
- 主催：認定NPO法人日本雲南聯誼協会
後援：中国大使館領事部 協賛：ひの社会教育センター

雲南を知る・語る・味わう

- トーク：初鹿野恵蘭(日本雲南聯誼協会理事長)
中村有里子(同理事)、寺内明子(同大宮支部長)
- ▲参加費：800円(雲南料理試食用材料費等)
- ▲会場：ひの社会教育センター第12研究室
- ▲日時：4月13日(土)午前10時～正午
- ▲申込み：03-5206-5260(NPO日本雲南聯誼協会)

【予告】今年も6月1日(土)・2日(日)に麻生市民館利用
団体による「あさおサークル祭」に参加します。山下孝
之さんのケーナ演奏や「わんりい」の会のお宝映像の京
劇ビデオを上映予定です。詳細5月号「わんりい」で紹介
します。

【4月の定例会】

- ◆定例会：4月15日(月) 13:30～
- ◆4月号のおたより発行日：5月1日(水)13:30
共に田井宅です